

## 所得比価格データを用いた食料品価格の国際比較 ～CPIにおける計測の課題について

大坂経済大学・小巻泰之

日本のエンゲル係数はここ数年急上昇し、水準でみると、日本は他国に比べ高水準であることがわかる。特に、2013年頃から、日本のエンゲル係数は急上昇を示している。物価高に対する家計への影響については、実質所得の減少による購買力の低下や、所得の低い階層への負担が大きくなっていることが指摘されている。しかし、CPIをもとにした議論では、CPIで基準時点の100という水準は、家計にとって価格水準を評価できない。

評価基準として、当該国の物価水準を評価するには所得水準で考える必要があると考える。本論では、所得比でみた価格データを作成した上で、Eurostat-OECDで実施されている物価水準指数等を基に、食料品価格の国際比較を行う。本論でえられた物価高の影響をまとめると、以下の通りである。

1. アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、カナダ及び日本の7か国について、2000年以降のエンゲル係数を比較すると、近年はどの国もエンゲル係数の上昇が確認できる。特に、2023年時点でみて、日本のエンゲル係数(27.8%)はイギリス(18.8%)の1.5倍となっている。
2. 食料品価格は、他の国と比較して、日本の価格は2~3倍程度高くなっている。2023年以降の世界的な穀物価格の高騰を受けて、穀物全体の所得比価格については、全ての国で(日:0.27%, 英:0.11%, 仏:0.10%, 伊:0.20%, 米:0.07%)と上昇が確認できるが、日本と他国との格差の関係に大きな差異はない。
3. 日本の過去の食料品価格についてみると、1970年代の所得比価格は20%を超える状況にあったが、その後は低下傾向が続き、1996~2011年まで12%台、2012~2018年までが14%台、2019年にはバブル崩壊後の水準と同等の15%台となり、2023年以降はさらに上昇し、家計における物価高の影響が明確となっている。2025年は、1986年以来の17%台と高水準になる見込みである。
4. 諸外国との食料品における価格差が、エンゲル係数における水準の格差につながっていると考えられる。つまり、日本はエンゲル係数の水準で考えても、他の国に比べ余裕度が低いことを示している。内外価格差が議論された1990年代からみても、日本の食料品価格の状況は格差がさらに拡大していると考えられる。
5. 日本では、野菜の種子は90%、飼料は87%、食鳥(鶏卵)はほぼ100%が海外に依存する状況であり、海外の生産国の需給や為替レートの変動の影響を受けやすい。

価格動向に把握には、COGIとCOLIがあり、日本のCPIはCOGIとされている。日本の場合、他国より食料品価格が高いことから、COLI的要素を含む価格動向を把握し、政策を判断する方法を検討すべきではないかと考える。